説教20200412イースター礼拝　イザヤ51：9-11　ルカ24：1-12　21-229　154　148

「奮い立て、代々とこしえに」

一言お祈りいたします。全能の神よ、あなたは一人の御子を死からよみがえらせ、永遠の命の門を開いてくださいました。どうか、御子の復活を祝う私たちを、聖霊によって罪の死から命へよみがえらせてください。父と聖霊とともに一体であって世々に生き支配しておられる主イエス・キリストによってお願いいたします。

　イースターおめでとうございます。この喜びの日に、私は悲しみの話から始めようと思います。それは苦しく悲しい主イエスの受難節の締めくくりということもありますが、今の、この地上が又、悲しみに満ちているからでもあります。

　施設で暮らす高齢者の方が、親しい人の訪問も受けられず暮らしておられます。また、世を去った方の枕辺に親族らが近づくことも出来ない。そして今日のイースター礼拝に集まることが出来ない教会もあります。聖餐式を受けられないでいる私たちは悲しくないでしょうか。隠退牧師の鈴木きみこ先生から教会宛てに切ないハガキが届いています。どうぞご覧ください。

　私たちはどういう訳か、悲しむことに蓋をしているのではないでしょうか。科学的な論理に基づいて、人と人との接触が制限されています。しかしそのことは私たちが嘆き悲しみ、涙することを制限するものではありません。私たちは大いに涙を流しましょう。主イエスは山上の説教で、悲しむ人々は幸いであるといわれました。今悲しんでいる人は慰められます。悲しみが深ければ深いほど、主から慰められて得られる喜びは大きく、そしていつまでも続くものとなることでしょう。

　主イエスご自身も、十字架に架けられる直前、ゲッセマネの山で弟子たちに、「わたしは死ぬばかりに悲しい」と言われたのでした。そして弟子たちも悲しみの果てに眠り込んだのでした。

　今日の旧約の聖書箇所イザヤ書５１章１１節にも、「主に贖われた人々は喜びと楽しみを得、嘆きと悲しみは消え去る」と歌われています。同じイザヤ書にはちょっと表現を変えて「喜びと楽しみが彼らを迎え、嘆きと悲しみは逃げ去る」と歌っている箇所もあります。これほどまでに、主なる神の前に嘆き悲しむことを、人々は、はばからなかったばかりか、悲しむことが喜びに至る筋道であることに気が付いていたのです。

　中世のヨーロッパではペストなどの伝染病が人びとを周期的に襲いました。死の恐怖におびえ、教会に集まった人々はひたすらエレミヤ哀歌を歌い続けました。この時代に創られた膨大なエレミヤ哀歌の音楽が今に残されています。「わたしの頭が大水の源となり、私の目が涙の源となればよいのに」といって世の中を嘆き続けた預言者エレミヤの嘆きが、連綿と中世ヨーロッパの教会の中で歌い継がれていったのでした。

　又、主なる神ご自身も私たちに泣くことをすすめておられます。エレミヤ書９章１６節（旧約聖書1193ページ）からお読みします。「万軍の主はこう言われる。事態を見極め、泣き女を招いて、ここに来させよ。巧みな泣き女を迎えにやり、ここに来させよ。急がせよ。我々のために嘆きの歌を歌わせよ」とあります。

　まさに私たちが泣く者と共になく者となるために、嘆くことが出来るような状況を敢えて整えるようにと主なる神はすすめておられるのです。

　更に、主なる神は、嘆き悲しんでいる者の額にしるしをつけて、印が付けられたものを、殺しの追っ手から逃れさせて下さいます。しるしのある者を殺戮者から過ぎ越して下さるのです。私たちは主なる神の耳に聞かれるように、大声で嘆き悲しみ涙いたしましょう。

　さて今日の新約の聖書箇所に最初に出てくるのは、嘆き悲しんで主イエスに従ってきた婦人たちです。彼女たちは涙にくれながら、墓に入って、主イエスの遺体を探したのかも知れません。準備した香料をどうしても主イエスの体に塗って差し上げたかったからでした。しかし墓の中に主イエスの体はありませんでした。途方にくれている婦人たちにたいして、二人の天使が現れます。婦人たちが天使たちを恐れて地に顔を伏せたのは何かあったのでしょうか。天使たちははっきりと言います、「なぜ、生きておられる方を死者の中に探すのか」この天使の物言いから、婦人たちが死んだ存在を探し求めていたことが分かります。嘆き悲しんで主イエスに従ってきて、遂に十字架上で息を引き取る姿を見せられた彼女らにとっては、死んだ存在に向かい、死んだ存在を探し求めるのもやむ得ないことだったかも知れません。しかしそんな究極の悲しみの中で、彼女らは以前聞かされていた主イエスの御言葉を聞くことが出来たのでした。「人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている」この預言は、主イエスが折に触れて人々に言い聞かせていた御言葉でした。婦人たちは将にこの悲しみのどん底にあって、主イエスの復活の御言葉を再び聞くことが出来たのでした。彼女たちがこの御言葉を聞くことが出来たのは、この時、彼女たちがどうしようもない悲しみに身を委ねていたからではないでしょうか。

　９節にそこで婦人たちは墓から帰って、とありますが、この帰ってという語句は、死の場所から生きる場所へと復帰したという意味合いがこめられています。彼女らはこの時、向かう先を生きる方へと変えたのでした。彼女らが生き生きとして１１人の使徒その他の皆さんに、この一部始終を知らせ始めた様が想像されます。

彼女らはこの御言葉によって悲しみから喜びへと大きく変えられました。将に今日の旧約聖書の箇所、「主に贖われた人々は喜びと楽しみを得、嘆きと悲しみは消え去る、」或いは「喜びと楽しみが彼らを迎え、嘆きと悲しみは逃げ去る」ということが彼女らの身の上に起こったのでした。

　しかし、この一部始終を伝え聞いた使徒たちには、この話はたわごとのように思われたのでした。たわごとのようにしか聞くことのできなかった使徒たちは覚めていたのでしょうか。冷静だったのでしょうか。そんなには悲しんではいなかったのでしょうか。或いは悲しむことに蓋をしていたのでしょうか。この時の使徒たちの様子は記されていませんので具体的には分かりませんが、各人各様に、生きている主イエスと別の方向へ向かおうとしていたことは間違いないでしょう。しかしペトロだけは違ったのです。ペトロは立ち上がって墓へ走り出したのでした。この立ち上がってという語句に注意したいと思います。実はこの立ち上がって、ギリシャ語でいうとアニステーミという語句は、三日目に復活するの、復活と同じギリシャ語なのです。つまり立ち上がるということと復活するということはもともと同じアニステーミというギリシャ語で言い表されているのです。エフェソの信徒への手紙５章１４節（３５８ページ）で「眠りについている者、起きよ。**死者**の中から**立**ち上がれ。そうすれば、キリストはあなたを照らされる。」と歌われていますが、復活ということは、立ち上がるということです。より正確に言いますと、立ち上がらせられるのです。弟子たちのなかでペトロだけは、立ち上がらせられたのでした。なぜ弟子たちのうちペトロがいち早く立ち上がらせられたのでしょうか。それは彼が、主イエスに対して最も激しく泣いた人物であったからではないでしょうか。ペトロは、主イエスが捕らえられ大祭司の家に連れていかれた時、遠く離れて主イエスに従っていました。ここにペトロの臆病な性格が現れてますが、その後、人々から問い詰められて、主イエスのことを「私はあの人を知らない」と否んだのでした。そして三度目に否んだ時に、主イエスは振りむいてペトロを見つめられたのです。この時ペトロは主イエスが「今日、鶏が泣く前に、あなたは３度私を知らないというだろう」と言われたのを思い出していました。この時、主イエスのまなざしを受けて、パウロはもう泣くしかなかったのではないでしょうか。ごまかすことも強がることも出来ず、ただ悲しみに身をゆだねることしかできなかったペトロは外に出て激しく泣いたのでした。

それからペトロが主イエスの十字架をどこで見ていたかは分かりませんが、ともかく、ペトロは弟子たちのうちで最も早く、立ち上がらせられたのでした。そして墓へ走り、身をかがめてなかをのぞくと、あま布しかなかったので、この出来事に驚きながら帰った、とあります。ペトロもまた悲しみから立ち上がらせられ、生きている主イエスに向かわせられたのでした。

　さて、今までに、少々、口が回らない受身の言葉、立ち上がらせられた、とか向かわせられたとかいう表現をしていましたが、この復活の出来事に際しましては、私たちは受身でしかありえません。私たちは、自分で復活し、立ち上がることは出来ません。本日のルカによる福音書の聖書箇所に出てきました人物は、誰一人、主イエスの復活の出来事に対して、どうこうすることは出来なかったのです。主の復活をしった婦人たちから嘆き悲しみは消え去り、彼女らは一部始終を人に知らせるものへと変えられました。又ペトロは立ち上がらせられて、この出来事に驚かされたのでした。全て受身の出来事でした。

　では、ペトロ以外の弟子たちはどうだったのでしょう。ご承知のように、こののち主イエスはそれらの弟子たち一人一人の前に、その体を表してくださいました。このように主イエスは永遠に立ち上がらせられた御自分の体を、弟子たちにお与えになったのでした。このように、この時に主イエスの復活を信じなかった者たちの上にも、やがて主イエスはご自身の体をお与えになられたのでした。

　さて、イースターのこの時を迎えた私たちも、今、ペトロのように立ち上がらせられています。私たちのなげき、悲しみはやがて消え去り、喜びと楽しみに迎えられます。御子イエスは代々とこしえに立ち上がらせられました。御子イエスは復活されたのです。私たちは御子イエスによって、個々の嘆き悲しみから逃れ、永遠の喜びと楽しみへと入れられるのです。

　これ以上述べても、イースターの大いなる喜びをお伝えできる気がしません。この時に私たちが聖餐にあずかることが出来ないのは、じつに悲しいことです。今はその悲しみを主にお委ねしましょう。主の御腕は代々とこしえに力をまとい、奮い立っています。主の御腕による、私たちの救いの道は、とこしえの喜びの道です。私たちは父と聖霊とともに一体であって世々に生き支配しておられる御子イエス・キリストの復活の喜びを代々に告げ知らせてまいりましょう。

お祈りします。天に居ます私たちの父なる神よ、あなたはこのイースターの時に、独り子イエス・キリストを、永遠に立ち上がらせて下さいました。それは、私たちの罪を赦し、私たちも主イエスと一つとなって、立ち上がらせられるためです。私たちに永遠の喜びを与えた下さったことに感謝いたします。あなたはまたこの喜びの道を代々とこしえに導いていてくださいます。どうか私たちが奮い立って、この主の道を隣り人に告げ知らせていくことが出来ますよう、私たちを守り導いてください。

　今、この地上で打ちひしがれ、悲しんでいる人たちを、あなたの御顔の光によって、喜びへと向かわせてください。この世に御言葉をあふれさせ、御言葉の出来事によって、どうか私たちをお救いください。父と聖霊とともに一体であって世々に生き支配しておられる主イエス・キリストによってお願いいたします。